

問題解説

1

説明文は加島祥造著『会話を楽しむ』（岩波新書、2004年）からの出題でした。引用した部分では会話は本来楽しいものであり、くつろぎ心を開いて行うものですが、日本では形式やマナーにばかり気をとられ、生きた会話がなされていないとの批判が述べられています。設問では文脈に沿って筆者の主張を理解し、それを文章で表現する能力を問うことを目指しました。

問一

会話に形式やマナーが必要になるのはなぜかが問われています。この質問は、6行目の「私たちはなぜこのように形式とマナーという二次的なものにならずに済むのだろうか」という部分と対応しています。よって、その答えにあたる「人は自分の考えや感じたことを、はっきりと口にしないことが多く」、「むしろ隠して喋る」という部分、つまり8行目～9行目を利用して答えます。設問で「なぜ」という質問形になっていますので、答えは「から」で止めます。よって解答は、「人は自分の考えや感じたことを、はっきり口にしないことが多く、むしろ隠して喋るから。」(41字)などとなります。なお、指定字数の8割以上、すなわち36字以上を採点の対象とします。この条件は以下の記述式問題に共通します。

問二

筆者が本当は楽しいと考えているお茶会の理想的な様子は何かが問われています。筆者によると、日本のお茶会は前世紀の形骸（しかばね）的文化だとあります。その原因はその場の会話が機械化した形式的文句のやりとりだけだからだと述べられています。ではそのお茶会に足りないのは何かというと、「楽しみとしての会話」です。それがお茶会のような洗練された世界で行われることが理想だと述べられているのです。よってこのことが述べられているイが正解です。アは「形式的なこだわり」とあるのが間違いです。筆者は「日本の茶席は形式的で凍りついている」と述べています。ウは「体制側にたつて」が不適當です。筆者によれば自分の考えをはっきりと口に出すことは、体制に逆らうことだとあります。エは「日常的な生活と同じように」とあるのが不適當です。お茶会はあくまで「洗練された世界」であると述べられています。

問三

「氷の張る寒帯」という比喻の内容を考える問題です。設問の指示に従って傍線部より前にさかのぼります。傍線部の直前に「もし誰も心を開かずにいたら」とあるので、心を開かない状態のことを考えます。その状態のことを述べているのは51行目の「非常に陰険な苦しくて鋭い言葉のやりとり」という部分です。

問四

会話におけるハプニングのおもしろさとは何かを説明する問題です。このことについて述べられているのは、傍線(4)のある部分の次の段落です。「その場の人々の取合わせ次第で、どのようにも変化してゆく。なにが話題に出るか、それがどのように発展してゆくか、その席にいる人々にも予測がつかない」という部分を指定字数に合わせてまとめます。設問が「どのようなところにあると言えますか」という形なので、解答は「～ところ。」とするのが原則です。解答例として「会話の場にいる人々の取合わせで様々に変化し、なにが話題に出るか、どのように発展してゆくかその席にいる人々にも予測がつかないところ。」(65字)などをあげておきます。

問五

空欄補充問題です。この部分は「形式的会話」「遠慮会話」「閉鎖的形式的会話」などと同じ意味として述べられています。5文字という指定があるので、それに合うものをさがすと、78行目から始まる最終段落に「形骸的形式会話」を「死んだ会話」と置き換えていることがこれに該当します。

問六

接続詞の選択問題。[あ]は形式・マナーが優位の場面の事例として、日本のお茶会の例が挙げられているのですから、「たとえば」が、[い]は日本のお茶会に下品ではない会話があれば、世界で最上のパーティーの場になるはずだが、実際はそうではないと述べている部分だから逆接の「ところが」、[う]は心が閉じられたならば会話はけっして楽しくならない。さらにもっと程度で進んで、陰険、苦くて鋭い言葉のやりとりになるとあるので「むしろ」がよい。

問七

漢字の書き取り。(ア)優位。(イ)設定。(ウ)機械。(エ)無愛想。(オ)軽視。
機械の「機」の字の画数に注意して採点します。

問八

本文の内容に合うものをさがす問題。アが正解です。

イは「伝統にのっとったものであり、その良さを認めたとき」とあるのが誤り。

ウは、文中に茶道は気取らないことに楽しさの鍵があるとは述べられてはいません。むしろ「自由で楽しい会話を押しつづ」すと述べられていますので不適当。

エはマナーを洗練した結果、気取らない会話ができるようになるのとあるのが不適当です。マナーがあっても生きた言葉の交流がなければ、「死者たちの境界」であると述べられています。

2

物語文は角田光代「さがしもの」からの出題。「この本が世界に存在することに」(2005年、メディアファクトリー)という単行本に収められた短編小説の一部から引用していません。

死期を迎えた祖母との約束を果たそうとする孫の姿や、母親の狼狽ぶりが娘の視点で描写されています。引用部分がやや長いですが、内容は難しくないはずで、設問では登場人物の心理の変化を、小説全体の流れの中で把握する能力を問うことをめざしました。

問一

主人公の「私」が「おばあちゃん」の死期が近づいていることを知るきっかけが書かれているところをさがします。母はおばあちゃんは「もうだめなの」というだけで、具体的な病状を教えていません。私は病院での看護婦の対応からそのことを知ります。抜き出すのは一文なので、「おばあちゃんはもうじき・・・とがめたりしなかった」(11～14行目)の部分になります。句読点を含めた5字であることに注意することが必要です。

よって正解は「おばあちゃ～なかった。」です。

問二

「私」がどうして「死んじゃうってこと?」という言葉の口にしなかったのかを説明する問題です。55字の指定なので少なくともその8割の44字以上書かれたものを採点対象にします。「私がおばあちゃんが死ぬかどうかをたずねることによって、母の悲しみをより一層深いものにしてしまうと思ったから。」を解答例とします。

問三

病床の「おばあちゃん」が「私」に本を捜して来いと頼む会話の中での口調から、その中に込められた意味を考える問題です。

選択肢をみると「厳格」「大胆」「冷淡」「ぶっきらぼう」がキーワードになっており、これらの語の感覚の違いを理解できているかを問うています。選択肢のアは私は何かを間違ってしまったわけではないので「厳格」は不適當です。ウの「冷淡」というのも孫への態度としてふさわしくありません。残った二つのうち、イは「細かいこと」の内容があいまいなので選べません。「私」が「聞いたことないよ、こんな本」と言ったことに対して即座に「聞いたことのある本のほうが少ないだろうよ」と即座に言い返したことに關する表現としてはエが最もふさわしいといえます。

問四

登場人物の心情を文脈の中から読み取る問題です。大型書店の店員は分厚い本をめぐって捜している本を調べてくれます。しかし、それでも見つからず、お辞儀をして書店を去るのです。このやりとりから私と書店の店員との間に感情的な対立や失望感があるとは読み取れません。よってアとウは不正解。イは店員に対する感謝の気持ちがあったとするも

のですが、ここではそれよりも本が見つからなかったことに対するショックを表現したものと考えるべき部分ですので、エが正解になります。

問五

やや長い記述問題ですが、出題の意図が分かれば容易に答えられる問題です。

「私」は、おばあちゃんの話から、自分が脳裏で考えたことがおばあちゃんに分かってしまったのではないかと思うわけです。解答例は「私がもしこの本を見つけ出さなければ、おばあちゃんは本当にもう少し生きるかもしれないので、見つからないほうがいいのではないかという考え。」です。文末の表現に注意してください。

問六

「ひ、と思う」という作者独特の表現の内容を考える問題です。該当箇所の近くだけを拾い読みしても解答は出ません。「またもや」とあることに注目します。これより以前に「ひ、と思う」と表現しているのは、問題文の冒頭です。そして、この 2 箇所に共通するのは母が泣いていることです。「泣いている母なんて、見たことがなかった」とありますので、それを見た「私」の思いがこの「ひ、と思う」感情の中心なのでしょう。よって、「ふたたび泣き出した母の姿を見て、とまどっている気持ち。」(27 字) などになります。

問七

慣用句の問題です。「水」に関する慣用句です。この形式の出題は本年度も例年どおりに行います。

正解は一がエ、二がウ、三がア、四がオ、五がイです。

問八

全文を通読した上で答える問題です。アは「病院ではまったく孤独な」という記述が誤りです。17 行目に「隣のベッドの人と話しこんでいるときもあった」とあります。

イは、おばあちゃんが捜してほしいと頼んだ本が実在しないとは少なくとも問題文中には述べられていません。書かれていないことは選ばないのが原則です。

エは、私がおばあちゃんにどのような感情を持っているのかを考える必要があります。問題文の後半にいたっても私がおばあちゃんに対して悪意を持っている様子はないので不適當です。

ウは 118 行目「おばあちゃんの乱暴な物言いに私は慣れているのに、もっと長く娘をやっている母はなぜか慣れていないのだ」という記述に対応しているのでこれが正解です。

さて、本校では明日第 2 回目の入試が予定されております。本日同様、説明文、物語文から各 1 題が出題されます。説明文では繰り返し出て来るキーワードに注意しながら、論旨を把握すること、物語文では登場人物の心情を文章の全体的な流れをつかみながらも、具体的な記述に即して考えることが必要です。今回同様、漢字や語句に関する問題が約 20

点分含まれます。50 字前後の記述式問題が全体を通して 4~6 題程度出題されます。